

## 佐賀県唐津市における「呼子朝市」の存続基盤

小島大輔・谷口佳菜子・城前奈美  
長崎国際大学人間社会学部国際観光学科

本稿では、唐津市呼子町における「呼子朝市」について、観光化の変遷と出店者の構成から、その存続基盤を検討することを目的とする。

「呼子朝市」は地域の変化に合わせて移動しており、また法律への対応のために組織化するなど柔軟に対応してきた。さらに、「呼子朝市」では「生活市」としての機能が低下していくなかで、「観光市」としての機能が増した。「呼子朝市」の出店者調査で、①鮮魚にイカが付加された呼子独特の出店品目構成による集客、②加工・乾物水産物販売による保存が可能な土産品の提供、③野菜販売者による賑わいの補強、④その他の販売による土産品目の多様性の創出、が把握され、いずれも「観光市」としての機能であった。ただし、この存続基盤の背景には、「生活市」としての機能が消失されず、賑わいの補強につながっていること、出店者同士の交流が出店者の出店意欲を維持させていることがある。

キーワード：呼子朝市、観光化、イカ、佐賀県唐津市

### I はじめに

#### 1. 研究の背景と目的

近年、朝市における全国的な衰退が見られ、朝市の役割について積極的な探究がなされている。例えば、細野（1997）は朝市出品用作物の栽培によって都市農業が維持される可能性を示した。また、三原（2003）は、朝市における女性の起業活動が女性の地位向上と生活技術の再評価などの効果をもたらすことを示した<sup>1)</sup>。

一方で、地域活性化の手段として朝市が注目され、朝市の観光化が指摘されている。杉本（2007）は、朝市を訪れる観光客の増加が販売品目の変化および商店街との連携をもたらす地域活性化に寄与したことを報告した。

福田（2001）は、街路市（朝市）を形態別に、地域住民を対象とした「生活市」と、温泉や観光地などの来訪客を対象とした「観光市」、その地域固有の産物を販売する「産地市」に分類している<sup>2)</sup>。

中村（2011）は、朝市を観光資源として捉え、

外来客を呼び込む役割を担うものを「観光型朝市」と呼んでいる。その代表例として、函館朝市、輪島朝市、飛騨高山朝市、高知の日曜市、呼子朝市、あつみ温泉朝市をあげている。また、地域内の消費者を対象として、農産物や食料品、生活必需品などを提供し続けてきた一部の朝市は、2000年代に入り各地で復活や新設が行われてきたことから、それらを「地域密着型朝市」と呼んでいる。この地域密着型朝市には、歴史ある朝市として、新潟県の上越地域における朝市、高知県高知市内における朝市、秋田県五城目朝市があげられている。これらは、観光資源としての活用もなされているが、主な来訪客は地元および周辺地域の一般消費者であることを特徴としている。

以上のように、朝市は、形態により多様な分類がなされていることがわかる。そこで、本研究では、先行研究をもとに、朝市を定期市の一つとして捉え、次のとおり定義する。

- ・開催時間帯は、早朝から午前中である。
- ・開催は、月に1回以上である。（年に数回開催される市、例えば有田陶器市等は除外する。）